

Title	セイの人口論
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.5 (1927. 5) ,p.583(1)- 627(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19270501-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾御用
芝三田通
日之出屋洋服店
電話高輪二二八五

會心ノ制服!!

輝ケル貴下ノ欣幸

燦トシテ

制服ノ御用ハ塾生間ニ

定評アル日之出屋洋服店へ

生地ニ——型ニ——仕立ニ

堅實ナル營業振リト充實セル裁縫部ハ

先輩諸兄ニ好評ヲ博シツゝアリ

御一報次第技術者直接遣し御相談申し上げます

三田學會雜誌 第二十一卷 第五號

セイの人口論

増井幸雄

人口と生存資料との關係に就いての考察は、云ふまでもなく Malthus に始まるものではない。Malthus 以前に於ける英國及び大陸諸國の學者にして、後に所謂マルサス人口論として知らるゝに至つたものゝ骨子を述べて居る者は少なくないのであつて、就中、Physiocrates の一派に屬する諸學者、並びに其の當時の自由主義を主張した學者の間には、人口が動もすれば生活資料に壓迫を加へ又は之を凌駕せむとするの傾向あることを指摘し、以て、マーカンテリズムその他の人口獎勵策を排斥するの論が多く行はれた。Malthus 自身も、其の『人口論』第一版に於て、『予の引證す

べき最も重要な議論は確かに新なるものにあらず。其の據つて立つ諸原理は、既に一部は Hume によりて證明せられ、又 Adam Smith 博士によりて一層詳細に説明せられたり。そは Wallace 氏によりて提唱せられ、本問題に應用せられたり。而してそは予の未だ嘗て遭遇せざりし多くの著者によりて恐らく開陳せられたりしならむと云つて居るのである。Smith にして既に人口と生活資料の分量との關係にも論及して居るをせば、千七百八十七年乃至八十九年の頃に Smith の『國富論』の精讀によつて經濟學の門に入つた J. B. Say も亦、Malthus の『人口論』の公刊(千七百九十八年)に先つて此の問題に關する考察を行つて居たと推察すべき理由が存するのであつて、彼れは Malthus の『人口論』の公刊後五年にして公にせられた其の著 *Traité d'Économie Politique* の初版以來既に人口の問題を論じて居るのである。

- (1) 例へば Le Marquis de Mirabeau, *L'Ami des Hommes*, 1^{re} Partie, ch. II; Moheau, *Recherches et Considérations sur la population de la France*. Liv. II. 等の如きは其の著しいものである。猶ほ Malthus 以前の人口學説の概觀に就つては C. E. Sargeland, *Pre-Malthusian Doctrines of Population*, 1924 を參照するが便利である。

- (2) *First Essay on Population*, 1798, T. R. Malthus, with notes by James Bonar. 1926. p. 8.

- (3) Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's Edition, vol. I, p. 30-2, 164, etc.

- (4) 拙譯『セイの經濟學』解題 XLIII-XLV. 頁。拙稿『價值論より見たるセイの地位』(本誌十卷十一號、四八一-四九頁)

人口の問題の取扱方は種々ある。之を生産と關聯せしめて説くことも出来る。Say は *Traité* の初版に於ては生産篇の最終の二章を之に充て、生産と人口との關係(第四十六章)及び生産と住民分布との關係(第四十七章)を論じて居る。又、之を分配の結果として觀察し、分配論の一部として説くことも出来る。Say は同書第二版以下に於ては、人口の問題は生産されたる富の分配の結果に外ならずのと做して、第二篇分配論の最後の一章(第十一章)を之に充て、二節に分つて同じ事項を論じて居る。更に又人口問題は生産及び分配の兩者の結果として觀察することも出来る。Say が *Cours Complet d'Économie Politique Pratique* に於て取つた態度は即ち之であつて、彼れは、第一部生産、第三部交換、第五部分配に次いで、第六部に於て十三個の章を設けて種々の方面から人口問題を取扱つて居る。斯くの如く、Say の人口問題取扱方法は時によつて種々雜多であり、又所論に精粗の差はあるが、其の見解に至つ

ては前後一貫して變る所はないのである。

以下、其の所説の概要を數個の項目に纏めて窺つて見よう。

(5) *Traité d'Économie Politique*, Ve éd., Tome II, Table des Matières, iii.

II

Say が第一に問題として居るのは、人口の數量は如何なる程度まで増加すべきや、といふことである。

Say は、人間の増殖力を見るに先つて、自然界に於ける有機體の増殖狀態を次の如くに觀察する。曰く。凡そ有機體は各種の事故や腐朽によつて生の狀態から死の狀態に移るものであるが、自然は種の絶滅を豫防する爲めには最も大なる警戒手段を採つて居る。就中最も有力なるものは胚種を極度に濫費して居ることに外ならないのであつて、假令如何に多くの胚種が生育前に死滅し生育後に破壊せられても猶ほ且つ多量のものが死滅破壊を免がれて種の保存に充分なるが如くになつて居る。若し他に妨ける事情なしとせば、如何なる動植物でも期年ならずして地球の表面を蔽ふに至らざるものはあるまい。伊太利の Gregorio Fontana

の所説に據れば、一本の非沃斯の總べての胚種を播くとすれば四年にして人間の住み得る全地球上を蔽ふに至るであらう、一對の鯨は假りに地球の表面が全部海洋であるとしても十年ならずして此の海洋を埋め盡すであらう、といふ。

(1) *Cours Complet d'Économie Politique Pratique*, VIIe Partie, ch. I. (Édition à Bruxelles, p. 368-9); *Traité d'Économie Politique*, Liv. II, ch. I¹, § I. (Ve éd., t. II, p. 378-9) (以下兩書の引用頁數は是等の版本に據る)

自然界に於ける一般有機體に就いて右の如き觀察を下して無限増加の傾向ありと做す Say は、人間を自然界の一事實と見、生物の一種と見て、『人間も無限増加の能力を有するの點に於ては他の一切の有機體と同様である』、『此の點に於ては人間も亦有機的自然界を支配する諸法則に服従する』と考へ、若し他に妨げる事情なしとせば人間は頗る急速なる勢を以て無限に増加するものであるとする。彼れは云ふ。若し人類の増加を制限する一切の原因を排したりとせば、一組の夫婦は少なくとも十二人の子女を生むことは容易である。尤も、經驗によれば人間の凡そ半數は二十歳以前に死滅するが、二十歳に達し得たる者は平均二十六歳の壽命を保つの蓋然性があり、而も男女の數は略同一である。故に、一組の夫婦は、自己と

同様に生殖を行ひ得る人間六人を育てることが出来る。因て、若し此の増加を妨げるものなしとせば、各國の人口は二十六年毎に三倍するであらう。而して、妨げる事情なかりし場合には人口が常に右の如き増殖を實現したことを證明する實例として、紀元千五百九十年に航海中に海難に遭つて阿非利加の孤島に上陸した一男四女が、和蘭人の同島發見の當時に於ては一萬二千人に増殖して居たとの Feijoo の談を引用し、更に最も有力顯著な實例として、Warden 氏の言を引用して米國に於て二十一年毎に人口が倍加したこと、極めて僅少なりし移民による増加を控除するとしても猶ほ二十一年四五ヶ月にして倍加したことを擧げて居るのである。

(2) Traité, loc. cit. (p. 379.)

(3) Cours, loc. cit. (p. 369.)

(4) Ibid.

(5) Cours, loc. cit. (p. 369-70.)

然らば、人間にしても一般生物にしても、其の本質的に有する急速なる増殖の傾向を事實上に實現して居らないのは何故であるか。Say は、それは結局生存資料

の分量の有限なることによつて制限されるからであるとする。即ち云ふ。『有機體が右の程度まで増殖するあらむが爲めに不足して居る所のもは何であるか。それは場所と食物とである。有機體にとつては、困難は決して増加の點に在るにあらずして、生存資料の獲得の點に存するのである』。歐洲諸國に於ける人口増加は米國に於ける増加に比すれば殆んど云ふに足らない程であるが、斯く前者に於て住民數を永久に減少せしめる原因は何れに在るか。それは戦争でもない、疫病でもない、又飢饉でもない。如何に慘虐な戦争でも人間を殺すこと年々の増加數の極めて一小部分に過ぎない。疫病も亦然り、而もそれは起ること稀であり且つ局部的に過ぎない。飢饉に就いても同様に云ひ得るのであつて、之によつて年々の増加數の二倍を殺したとしても自然的の増加を二ケ年だけ遅らせるに過ぎない、而も之に際會することは十年に一回とはないのである。然らば、人口を或る限度に維持してそれ以上に出でしめない原因は何であるか。『それは、明かに生存資料が制限して居るのである。人間の再生され増加する傾向は云はゞ無限であるが、人間を生存せしめる資料は有限である、而して人間は其の限度以上に生存し得

ざるは論なき所である。之は人口に關する一切の考察の根本的原則である。(6)

(6) Cours, loc. cit. (P. 369, 370, 371.)

然らば、生存資料は如何なる方法によつて人口數を制限するか。Sayは其の方法に二ありとする。曰く、『人口の増加は、單に其の生存資料の許す限度まで到達するのみならず、更に進んで其の限度を稍々超過するを常とする。』然る場合には、人間は慘たる破壊によつて、生存資料の許す程度まで引き戻される。之が其の第一である。然るに人間は、總べての動物中に於て獨り能く家族の無謀なる増加の結果を豫見するものであつて、斯かる結果を免がれしむるが如き限度を豫め設ける。其の結果として、自然的の衝動に無節制に耽る場合よりも人數が遙かに少ない。此の豫見こそ他の何れの原因よりも一層多く一國の人口を其の生産に比例せしめるのである。之が其の第二である。而も此の豫見は各家族の生存資料の命する所であるから、結局は常に生存資料が人口を制限することになる。之によつて見れば、人口の自然的増加は二個の障礙を受けるものなることが分る。一は、人口をして生産量の定める限度を越えざらしめるものであつて、之を豫防的障礙

と呼ぶことが出来る。他は、不豫見過誤又は政府の誤れる獎勵によつて生産量以上に人口を増加せしめる場合には、人口を死亡増加によつて無理に其の必然的高まで引き戻すものであつて、吾人は之を制限的又は禁壓的障礙と呼ぶことが出来る。(6)

(7) Traité, loc. cit. (P. 382.)

(8) Cours, VI^e Partie, ch. II. (P. 373.)

(9) Ibid.

III

Sayは、推理及び實例によつて、人口の限度を定めるものは生存資料であるといふことを立證した。然らば、『人口の唯一の限度たる此の生存資料は如何なるものから成るか』。Sayは此の間に答へて、交換の自由の存する限り、それは何等特定種類の物から成るのではなくして、一般に人間の欲望を満足せしめ得る一切の物から成り、一般的生産物から成るのである、と云ふ。『諸國並びに諸階級に於て生活に必要なものが其の國又は階級の人口にとつての生存資料たるのであつて、各階

級の人口は其の自由に處分し得る是等種々の資料の分量に比例して或は維持され、或は増加し、或は減少するのである。……一國の人口は其の國の生産物によつてのみ制限される。生産は人口の尺度である』とする。勿論、Say は『食料品が生存資料の第一位に置かるべきもの』なることを認めるが、此の食料品たるや、交換の自由の存する限り他の何れの生産物を以てしても之を獲得することが出来るから、結局、生存資料たるものは一般生産物である、と做し、人口は食料品の分量に比例せずして總生産額に比例するものである。例へば、『波蘭に於ては一方里上で和蘭に於けるよりも遙かに多量の小麦を産するが、而も一方里の養ふ人口は後者に於けるよりも遙かに少ない。それは、後者に於ては同一面積が小麦を産することは少ないけれども總額に於て一層多量の生産物を與へるからであり、其の生産する物の價值は其の生産せざる物を買ふに役立つからである。人口を奨励するのは某々の生産物ではなくして生産全般である。交換の容易なるが爲めに、世人は儲けること以外を考へないで済む。……故に吾人は、一國全體に關して生産物の分量しか考へないで済むのであつて、何れの國に於ても住民數は其の國の總

生産の許す程度まで増加し、それ以上は決して増加しない』と反復することが出来る。』

(1) Cours, V. e Partie, ch. 2. (p. 371.) Cf. Traité, Liv. II, ch. II. § 2. (t. II, p. 381.)

(2) Traité, Liv. II, ch. II. § 1. (p. 380.)

(3) 茲に Say が、人口を支持するものは一般生産物なりとする場合に於て、其の所謂生産物中には無形の生産物も包含せられて居る。曰く『無形の生産物に至るまで、假令それは運送せられ難しきも、一國民に對して食料品を取得せしめざるものあることなし』云々。(Traité, loc. cit. (p. 381.)) 又、其の中には資本も包含されて居る。曰く『節約より生ずる資本は再生産によりて生産者を養ふ。……又、一旦窮乏の見舞ふ所となるや、此の資本を消費貨物と交換して食物に充當することを得』云々。(Cours, loc. cit. p. 372-3.)

併しながら、右は交換の自由を前提としての立論である。然るに、此の自由は必ずしも常に存在するものではない。少なくとも、其の自由の不完全な場合、即ち交換が頗る高價につく場合あることを認めなければならない。故に Say は『交換の自由なきとき、又はそれが高價を要する場合には、生産物の種類如何を無視することは許されない』と云つて、更に考察を進めて居る。即ち彼等は、此の點に就いては、

先づ第一に、人間の諸欲望中に於て食物に對する欲望は最も普遍的、恒常的、反復的、且つ緊急的なものであり、多數者を概観すれば之に對しては他の總べてのもの、全體に對するよりも一層多額に支出せられるものであるとする。第二に、此の欲望の對象たる食料品は其の増加の勢が急速でない、之が獲得の手段には限度があり、而も此の限度には他の生産物に對して存する限度よりも一層急速に之に到達するものであるとする⁽⁴⁾。而して是等二つの事情から推論して『人口を最も有力に制限するものは是等食料品の騰貴である』といふ結論を導き出し、食料品騰貴の場合に於ける貧民階級の人口減少を叙して『貧民階級にとつては食料品の窮乏は生活に必要な他の一切の生産物の窮乏を來さしめる』と云つた後、『人口の維持に貢獻するものは一般に生存の一切の資料なることは眞實なるも、人口は殆んど常に結局は人が或る價格以下にて取得し得る食料品の分量によつて制限せらるゝこととなる』と斷じて居る。即ちSayは、交換の自由なき場合又は其の不完全なる場合には、生存資料は食物から成るゝするのであつて、此の論旨を證明する爲めに、諸威に於ける豊年及び兇年の結婚、出生、死亡の數の比較を示して人口増加が前者

に於て大なることを述べ、愛蘭に於て馬鈴薯の栽培が開始され普及するにつれて人口の増加を來したことを述べ⁽⁵⁾、又英國に於ける小麥價格の高低と死亡數との間に比例關係あることを指摘して居るのである⁽⁶⁾。

(4) Cours, Vie Partie, ch. IV. (p. 377.)

(a) 食料品の増加の勢は漸次遅緩となることの論に就いて後述(四〇一頁)參照。

(5) Cours, loc. cit. (p. 377-8.)

(6) Cours, loc. cit. (p. 378.)

(7) Traité, Liv. II, ch. II, § 1. (p. 383.)

之によつて之を見れば、Sayは、生存資料は交換の自由ある限りは一般生産物から成り、其の自由なきか又は其の不完全なる場合には食料品から成るゝと做すのであるが、思ふに、交換の自由ならざる場合は寧ろ特殊な部分の場合に外ならないから、一般的命題としては、一國の人口を左右するものは一般生産物の分量であると做したものと云ふことが出来る。尤も、Sayは『右の一般的命題は個々の事情によつて幾多の修正を受ける』ことを認め、若し生産物の分配が不公平な場合、一人が其の地位を保ちつゝ生活するに要する以上の分量を所有する場合には、然らざる

場合に比して人口數は少ないと云ひ、又一國の欲望が大なる場合には同量の生産物は反對の場合に比して其の養ひ得る人口數が少ないと云つて居るが、⁽⁸⁾併し、他の一切の事情が同一である限りは、人間の數は生産物の分量に比例することは常に真理であり、而して此の真理は、苟も經濟學を論ずる著者の大部分が、他の諸點に關して意見の一致を缺き居るに拘らず之を承認して居る所である⁽⁹⁾とて、之を以て人口の根本原則なりと斷じて居り、過去及び將來に於ける醫學の進歩も、疾病豫防又は治療の術の發達も、人口の數には毫も影響しないと云つて居るのである。⁽¹⁰⁾

(8) (9) Traité, loc. cit. (p. 385-6.)

(10) Cours, VI^e Partie, ch. VII. (p. 384.)

四

人口の増殖に關する原理を右の如くに立論した Say は、之に對する二三の反對論を拉し來つて其の非理なる所以を論じて居る。

其の第一は、人口の増殖力は Say 等の云ふ程に大なるものでないといふ思想である。Say の言を藉りて云へば、人間の増加力は人口をして生産量の限度に到達

せしむる程に強力ではないとする思想、詳しく云へば「人類は決して土地の生産し得る一切の生活資料を消費し盡すの程度には到達しないものである、若し増加のみ要求するものとせば、人間は苟も其の養はれ得る處には到る處に擴布増殖するとになるであらう、而して豐饒無人の幾多の地方は住民を以て蔽はれざるを得ざるに至るであらう」とする思想である。然るに Say は、右の反對論の後半部に著目して、斯くの如き思想は生産に關する不完全なる見解から生ずるものであるとする。即ち「農業生産の起らむが爲めには耕作され得る土地を要するは事實であるが、猶ほ其の外に農業的産業と資本とを必要とする、而して産業の發展と資本の集積及び利用との爲めには之に妨害を與へざるが如き制度を必要とする」とて、豐饒なる土地と雖も必ずしも常に生産量多きにあらず、從つて常に人口多きにあらずることを指摘し、其の例として、マレー半島は地味に於て支那に劣らざるにも拘らず住民が掠奪を事とし勤勉の風なく行政頗る亂れ居るが爲めに人口を養ふこと支那に劣るの事實、又ウクライナが制規の政府を戴きつゝも土地の利用が封建制度に妨げられて居るの事實、更に燃料の缺如や交通機關の不備が一般生産の發

達を妨げ延いて農業の發達を妨げるの事實等を擧げて、土地が大部分は其の肥沃の程度や自然的の便宜と同じ程度の人口を有し居らざる旨を附記して居るのである。

(1) Cours, VI^e Partie, ch. III. (p. 375.)

Say が引用し來つた第二の反對論は Simonde de Sismondi の意見である。De Sismondi は其の著 *Nouveaux Principes d'Economie Politique*, 1819. の第七篇に於て人口を論じて居り、就中その第三章に於て土地の產出し得る生活資料の分量は何等人口の制限たらざることを論じて居る。而して此の論旨を立證せむが爲めに、Montmolency 家は嘗て食料に事を缺いたことはないから其の家族は Malthus の法則に従へば二十年毎に倍加したるべき筈であり、同家の開祖が紀元千年に此の世に在つたものとすれば其の家族は紀元千八百年には二十億人以上に上つた筈であるのに、事實は今日毫も其の事なき事例を引用し、名家や富豪は他の何物よりも速に減少し消滅するの傾向がある云ひ、之より結論を引き出して、人間の増加に對する主たる障礙は食料品の分量に存せずして、人間自身の自意の中に在ると云つて居る。然

るに Say は、de Sismondi の此の意見は、生存資料と食物とを混同したものであるとする。食物は、人間の大多數にとつて生存資料の主なる部分を占めて居ることは事實であるが、宮中や軍隊に於て重要な地位を占めて居る名家にとつては第二次的の支出目的物たるに過ぎないのであつて、高貴の家族にとつては子供に分與すべき土地を要し、現在又は過去の使用人に給料又は恩給を與へるを要し、身分相應の結婚を必要とする。結婚を約し又は履行する爲めに斯かる豫備を具へ置くことを必要ならしめるが如き一大家族を維持し給養すること能はざるべしとの懸念こそ、最も有力に子女の數を制限するに至らしめるものである。子女の數を制限せむとするの節制は、自己の家族が社會に於て其の地位を失墜することを虞れるほゞ益々強力に働く。勞働を恥辱と考へる貴族は子孫を勞働せしめようとは欲しない。Montmolency 家が生存資料を缺かなかつたのは、餘りに人數を増さなかつたからである。人間の數を制限するものが人間の自意たることは、此の自意が生存資料の缺如又は缺如の懸念から來ることを認める限り、敢て争はない所である。而して其の場合には、人間増殖の限度を劃するものは常に生存資料の制限で

あるといふことになる。(3)

(2) Cours, loc. cit. (p. 376)

更に Say は、右の de Sismondi の意見と同様に、人口數を制限するものが生活資料たることを否認する別個の一意見を拉し來つて之を駁して居る。此の意見は、人口は常に社會を成せる人間を養ふ所の通常又は異常の有らゆる弊害によつて制限されるものであると倣すものであつて、『此の種の説を爲す者は、古い民族に於て人口が殆んど停滯的にして何等増進の事實なき原因を、多數の事故や病氣や罪惡に歸せしめ、人口増加に伴ふ腐敗に歸せしめて居る』が、Say は、此の説は、第一には文明の古い國に於ても生産の増加あるや忽ち人口の増進を見たるの事實を無視したものであり、第二には、若し生殖力が人口維持に困難を感じる程であつたとすれば、古い社會に於て幾多の大災厄によつて奪ひ去られたる人口は如何にして爾く速かに恢復せられたかと説明されない、と評して居るのである。(4)

(3) Cours, Vie Partic, ch. 2. (p. 373-4.)

五

Say が人口に關して第二に問題として居るのは、人口の地理的分布は如何にして定まるかといふことである。

人口の地理的分布狀態如何といふこと、又は人口の地理的分布は如何にして定まるかといふことは、各地それの人口の數量如何といふこと、又は各地それの人口は如何にして定まるかといふことに外ならないのであるから、全世界に於て養はるゝ人口數量如何といふことも、一國內に於て養はれ得る人口數量如何といふことも、將た又、各地方各地點に於て養はれ得る人口數量如何といふことも、結局する所、其の觀察する範圍に廣狹の差があるのみであつて、或る地域内に於ける人口數量如何を決定する原因に至つては素より同一であるべきである。故に Say は、『人口の原則は一國全體に就いて作用すると同様に、又同じ方法によりて、各國の各地方に於ても作用する、此の原則が各郡又は各都市の人口を決定するのであつて、各地方は其の生産物に比例する住民數を有する』と云ふ。尤も彼れは、各地方の産業の生産物が宮中の浪費の爲めに徴收され支出されるといふが如き強制的分配の行はれる場合には、價值の生産されること少なき地方にも人口が多大に集

中することを認め、其の一例として往時のエルサイユを擧げて居るが、一たび此の強制的分配の止んだ以後に於ては同市の人口は忽ち二分の一、三分の一に減じたことを指摘して居るのであつて、苟も生産物の自然的分配が行はれ、事物自然の運行が強制力の介入によつて攪亂されない限りは、各地方はそれ／＼其の生産物によつて生活せしめ得る丈の住民を有し、決してそれ以上を有することはない、と斷言して居る。而して此の場合にも、人口を養ふものは其の土地の生産物全般であつて何等特殊の生産物ではないとすることは、一國全體の場合及び世界全體の場合と同様である⁽²⁾。

(1) Cours, VI^e Partie, ch. 9. (p. 390.)

(2) Ibid.

既に然りとすれば、『或る地點に多數の人口ある理由を知らむとする場合、又は或る地點が養ひ得る人口數を豫見せんとする場合には、先づ其處に在る生産手段を探るべきである』⁽³⁾。Sayは、此の生産手段には、産業資本土地の如く總べての地方にとつて同一なる一般的手段と、各地に特有個別的なる手段との二ありとなし、

前者は既に生産論に於て詳論したから茲には其の再説を省き、單に特有個別的の手段のみに就いて數個の例を示して居る。其の云ふ所に據れば、石炭坑及び石材切出場の開かれた所、共有地の分割の行はれた所、販路に有利なる道路商港及び其他の交通機關の開設された所、就中、新規に工業の樹立された所に於ては人口が増加する⁽⁴⁾。又、牧場は農耕地よりも人を要すること少きが故に、前者の地方では一層多數者が工業に従事することを得て、小麥耕地の地方よりも人口が多であるが、同時に大農場や牧場の作られた地方では產出價值の大部分が都會在住の資本家に屬する場合には人口が減少する⁽⁵⁾。又、燃料の有無、増減、優劣等は人口を左右するのであつて、此の點に於て不利なる地方は人口が減少し、有利な地方は人口が増加する。更に、生産費を節約し得たる地方では所得を増加せしめたと同一の結果を生ずるのであつて、蒸氣機關を有利に人間の勞働に代へ得た地方に於ては人口も増加する⁽⁶⁾とせられて居る。勿論、是等の諸例は何れも各地の人口の増減を來すべき個々の一原因たるに過ぎないのであつて、他に之と拮抗し之に優越するが如き反對原因ある場合には其の影響が實現されないことは云ふ迄もない所で

あるが、而も是等は何れも生産物又は所得の増加に貢献する個々の原因であり、人口支持の原因に關する一般的立言を具體的に例示したるものに外ならないのである。

(3) Cours, loc. cit. (p. 390.)

(4) Ibid.

(5) Traité, Liv. II. ch. II. § 2 (p. 402.)

(6) (7) Cours, loc. cit. (p. 391.)

然らば、狭少なる地域に多數の住民の密集群居する都市と、廣大なる地域に少數の住民の散在する田舎との相違も同様に生産物の多少によつて説明せらるゝや否や。都市の成立は、其の所在する狭少なる地域上に於て、廣大なる田舎よりも多大の生産物の生ずることを示すものなりや否や。Sayの所説に據れば、此の質問は肯定せられる。Sayは都市成立の經過を説いて次の如く云ふ。分業の時代に於ては交換を行ふ爲めに集會の場所を要するが故に、茲に特定の地點に生産者の集會する市場が生ずる。而して生産者相互間の關係が重要を増すに至らば、定期的なりし市場は恆久的となり、人は何時たりとも商店に就いて必要な物品を買入れ得ることになる。此の便宜は、自己の産業を行使する地點を自由に選擇し得る一切の生産者を市場の周圍に集まらしめるとになり、生産者たらざる單なる消費者の如きは好んで此の市場に居を構へることになり、多數の人を雇傭する工業者は當然に住民多き地點の近くに位置を定めることになる。而も斯かる場所は全郡の住民の自然的の集合地點であるから、行政官廳、裁判所、及び之に屬する人々の居所となる。都市は斯くして成立した。就中、其の地點に特有なる利便の外に、更に一切の隣接地方と容易に交通し延いて國內の遠隔なる地方及び外國と交通するの利便を併有する場合には特に速かに發達する。交通の利便は肝要である、蓋し、何れの地點も、之の往來が容易に行はれ得る場合に於てのみ集合地點となるのであるから、⁽⁸⁾之によれば、都市は生産物の生産及び交換に便宜な地點に成立すると云ふのであるが、Sayは商業を目して生産の一形態と見做して居るから、⁽⁹⁾結局、都市は工業及び商業による價值の生産の行はれ易き可能性に基づいて發生すると云ふに外ならないこととなるのであつて、都市の成立をも人口數量に關する一般原則によつて説明して居ると云ふことが出来る。

- (3) Cours, VIIe Partie, ch. 10. (p. 391-2.)
(9) Traité, Liv. I, ch. 9; Cours, I^{re} Partie, ch. 8.

Say は都市は商業及び工業を基礎として成立し發達すると云ふ。故に都市の成立發達の爲めには、是等の産業の據つて立つべき基礎が先づ具はることを要するの理である。即ち、工業都市の成立又は一都市の工業的發達に就いては、生産的資本、産業の才能、及び生産物の完成販賣の時まで産業者を養ふに要する一切の物資等の存することを必要とする。或は又、商業都市の成立又は一都市の商業的發達の爲めには、資本の外に、産業發達を助長する地點と國家的制度とを要す⁽¹⁰⁾と做して居るが、其の特に重きを置いて居るのは位置の利便、交通上の便益といふことである。『都市成立の第一の動機たる中心及び集合地點の欲望は、同時に都市擴大の最大の動機である。』アレキサンドリア、ゼニス、コンスタンティノープル等の繁榮は、其の當時の交通の要衝に當つて居たことによつて生じた。大商業に於ては商人は商品と共に旅行するの必要はないから、大商業都市には他國の商業地と取引する仲次商人があつた筈であり、商品の運送によつて多大の價值の生産される所

では多大の人口が養はれ得たのである。然るに羅針盤の使用による航海の發達以來、是等の大商業都市は交通上の重要を失ひ、今や昔日の繁榮は消え去つて、却て從來の商業通路から遠く離れた地點でも苟くも便宜なる港と産業及び資本とを擁する所には至る所一大仲次商業地が出現するに至つた⁽¹¹⁾と説明して居るのである。

- (10) Traité, Liv. II, ch. 11. § 2. (p. 405-6.)
(11) Cours, loc. cit. (p. 392-3.)

更に Say は同じ原則を以て人口の國際的移動、即ち移住及び植民の現象をも説明して居る。Traité に於ては、植民地建設の動機を論じて、往時にあつては内地の人口増加して狹隘を感じるに至つたこと及び迫害によつて國土から驅逐されたことが原因であつたが、近時に至つては其の外に、短期間内に多額の富を祖國に齎らさむが爲めに一時的に移住することも一因となるに至つた⁽¹²⁾と云つて居るが、就中、人口増加に基づく生活の壓迫を最も重要な原因と見做して居ることは、晩年の作たる Cours 中、植民を論ずる章の劈頭に於て『總べての人口が生存資料以上に

出でむとするの傾向を有すること、並びに、無慈悲なる必要の指定する限度内に引き戻されつゝ種々の弊害に曝されることからして、過大なる人口を有する總べての國民は新なる植民地を形成するに至らしめられた⁽¹²⁾と云つて居ることによつて窺はれる。既に植民の主たる動機が人口の過大に在り生活資料の不足に在りとすれば、眞先に祖國を去るべき者は生活資料の獲得に最も困難しつゝある貧民たるべきやの觀があるが、⁽¹³⁾は眞先に植民地に向ふ者は資産に比して子女の過多なる中産階級から出ると云ふ。蓋し、植民の爲めには渡航の費用と最初の收穫までの生活支持の費用とを要するからであつて、貧民は植民地建設後、相當の資本の蓄積が行はれた後に始めて渡航して自己の勞働を提供するに至ると述べ、植民地に於て長期間に亘り賃銀が高率に維持されて居る現象を此の點から説明して居るのである⁽¹⁴⁾。

(12) Traité, liv. I, ch. 19. (t. I, p. 350-1.)

(13) Cours, VIIe Partie, ch. XIII. (p. 400.)

(14) Ibid.

六

人口に關して Say が第三に問題として取扱つて居る事項は、人口多きことは果して望ましきや否やといふことである。此の點に關しては Say は二個の觀點から立論する。第一は人口數と國力との關係如何、第二は人口數と住民各個の幸福との關係如何、即ち是れである。

自由と財産權との尊重を以て産業發達の根本條件と見做し、對內的にも國際的にも産業主義を持して權威干涉を排斥する Say は國力の過大なる膨脹を喜ばず、他國を威壓せむとする程の國力伸張を喜ばない、少くも斯かる野心は國の富を妨げるに似して居るが、⁽¹⁵⁾而も或る程度まで國力の充實して居ることは望ましいとするのであつて、『一國が容易に他國に侵略されることなく、又、商業及び科學研究の爲めに外國に赴く同胞を有効に保護するに足る程度まで國力の擴大され居ることは萬人の認めて以て望ましとする所である』⁽¹⁶⁾と云つて居る。併しながら、此の國力の大小は人口數の多少と比例的關係を有するものではないとする。支那は一平方里につき人口三百を有し、英國は一平方里につき人口百六十五を有する

に過ぎないが、何人も支那を目して英國よりも國力大なりとは云ひ得ない。又、奴隸制度の認められる國に就いて其の重要を測るに人口數のみに基礎を置かば多大の誤謬に陷る。人口の數量と同時に其の品質を考へなければならぬ。而も住民の品質は主として其の消費する所のものゝ如何に係る。教育は消費の一部を成す。國力の大小は、少くも近代に於ては主として富の生産の大小に基づく。

(1) Say は、千八百十五年、英國が外國穀物の輸入激增して穀物價格に過度の下落を來し、穀物關稅による農業保護を行ふべきや否やが重大なる問題となつたことを述べた後に、英國の農業衰頹の主たる原因は「英國が世界の政治に對して過大の勢力を振はむと欲したとき」に在るを云つて居る。(Traité, Liv. I, ch. 17, § 4. (t. I, p. 335.)

(2) Cours, Vie Partie, ch. 8. (p. 388.)

(3) Cours, loc. cit. (p. 387.)

然らば、人口數と住民各個の幸福との間には如何なる關係があるか。Say は、是等兩者の間には比例關係なしと云ひ、各個人は同胞の數の多きことによりて幸福を來すにあらず、寧ろ自己及び同胞の生活安易によつて幸福を來すとす。即ち云ふ。『人口多きは生産大なるの確證である、併し大なる繁榮あらむが爲めには如何

なる人口も其の生活必需品の給與充分なる其の上に更に幾分の過剰をも給與せられ居ることを要する。』否更に進んで云へば、『人口多きことは必ずしも生産多きことの證たるを得ない。氣候及び事情の相似たる二國間に於ては生産の多少と人口の多少とが比例するであらうが、欲望の程度の低い場合には、生産力は劣つて居ても人口は一層多數を算するであらう。』故に、人間の生活狀態に關しては、人口數と生産物の數量とを比較するを要する。然るに他の事情の等しい限り、個人の幸福は其の満たされる欲望の分量に比例する、従つて彼等の自由に處分し得る生産物の分量に比例する。勿論 Say は、此の場合に、人は少きを以て満足し得るほど益々幸福なりとの禁欲主義の所説並びに、財の過剰が飽滿を來して何等幸福に貢獻せざるの事實を看過しては居らないが、前者に就いては、それは誇張を含む、若し此の誇張を除かば、それは單に誠直なる産業によりて入手し難きものゝ剝奪に堪えよと教へるのみである。故し、又後者に就いては、飽滿の場合に相當し得るのは萬人中の一人にも當らないのであつて、根本に於て社會の幸福が其の充たし得る合理的欲望の分量に比例することを妨げない、として居るのである。

- (4) Cours, loc. cit. (p. 388.)
- (5) Traité, Liv. II, ch. 7. § 1. (p. 395.)
- (6) Cours, loc. cit. (p. 383.)
- (7) Ibid.

住民の幸福の最も大なるは人口數の割合に最も多量の生産物の存する國であるとの理論から推論すれば、人口の減少は一人當りの生産物の分量を増加せしめて個人の幸福を大ならしめ得べきやに想像せられ得る。而も⁽⁵⁾は之を否定する。『残れる者をして一層安易なる生活を爲さしめむが爲めに人間の數を減ずることを有用適切とす』結論すべきではない。安易は斯くの如き方法によつて買ひ得るのではない。斯くの如き方法は、人間を破壊することによつて、消費者を破壊すると同時に生産者をも破壊することになる。『故に、生産物の不足せる場合には、人口を減すべきにあらず、生産を増加すべきである。』一國は住民少なきが爲めに給養一層よろしきを得るにあらず、人口多きが爲めに給養よろしきを得ざるにあらず⁽⁶⁾。Sayは現時の歐洲が、一層頻繁に窮乏の見舞ふ所となつた中世に比して遙かに多大の人口を有すること、エリザベス時代の英國は現時の人口の半數を

有したるに過ぎざるも、而も現時の如くに物資の供給豊富ならざりしこと⁽⁷⁾を指摘して其の例證として居る。

- (8) Cours, loc. cit. (p. 388-9.)
- (9) Traité, loc. cit. (p. 394.)

要するに、Sayは『充分に生活するの資料を自ら有する人口は望ましい、貧しく生活し得るに過ぎざる人口は恐るべきである』⁽⁸⁾、生活資料の増加を伴ふが如き人口増加は喜ぶべきであるとする。而も此の増加が、外國移民を迎へ入れることによつて生じた場合には一層有利なりとする。『一國の獲得して眞に有利なるは自ら財産を携へて來り住まむとする外國人を迎へることである。斯かる外國人は一國に對して一時に富の淵源二個を與へる、自己の産業と自己の資本とが即ち是れである。若しそれ此の外國人にして同時に好感を有し德義を具へたる場合に於ては、茲に尊重すべき人口を増加せしめることは云ふ迄もなく、更にそれは一國の領土に或る耕地を附加したるにも相當する』⁽⁹⁾。彼れは、諸國政府が人口の大なることを示し得ることを以て得意としたのは道理ありとして居る⁽¹⁰⁾。

(10) Cours, loc. cit. (p. 389.)

(11) Traité, Liv. I, ch. 20. (p. 382.)

(12) Cours, VI^e Partie, ch. VI. (p. 381.)

既に人口の増加を望ましきものとする以上は、人口の減少は當然に悲しむべきものとされなければならない。Sayは、假令一時的の災厄によつて人口の減少を來すとも、資源だに傷はれずに残存する限り人口は忽ち恢復されると樂觀して居るが、而も多數の人間の死滅は、第一に、生き残れる多數人士に精神上及び物質上の苦惱を與へ、才能徳性の衆に優れたる人士の喪失は一國の幸福を滅殺するが故に、人道から見て悲しむべきものであり、第二に、成年者は今日あるを得るに至らしめたる數年間に互る立替支出を代表する資本の集積であつて、此の成年者を多數に失ふことは既に獲得されたる富の大損失である、とする⁽¹⁰⁾。移住による人口の減少をも亦同様に見るのであつて、『成年者の移住は一個の弊』なりと認める。『特にそれが勤勉なる人、學識ある人、有用なる人たる場合に於て然りとする。』蓋し、國に彼等を養ふの力ある限り、移住は永く住民數を減少せしめるの原因たらざるは疑な

いが、而もそれは成年者が小兒に代られ、強き者が弱き者に代られ、國と家族との給養に貢獻する者が却て數年間其の負擔となるべき者に代られるの原因たるが故であつて⁽¹¹⁾、『産業と資本と好感とを伴へる移住に至つては、之を迎へる國にとつては一個の純平たる利得たりとするも、之を送り出す國にとつては最も悲しむべき損失なりとする⁽¹²⁾。但し此の言は、Sayが移住を常に國の損失なりとするの意を解することとは出來ない。彼れは、『植民地が無人の地方又は僅少なる土著民あるに過ぎざる地方に設けられ、而も判斷あり行動を慎しむ場合には、新植民地の形成は人類の進歩及び幸福にこりて有利である』と云ひ、『一國の元首たる者は、移住が適當に行はるゝ限り、之によつて國が弱められると考へることは愚である』。諸國は植民地を生んで後に始めて最大の國力と最大の繁榮とに達した。『國を衰へしめ人口を減少せしめるものは國內に於ける罪惡であつて移住ではない』と云つて居るのである。彼れが、植民地を以て母國の負擔なりと云ひ、英國は北米の植民地を失ふことによりて利益せりと云ひ、諸國は應て植民地を放棄するに至るべく植民地を辯護する者は之が維持によりて私腹を肥やし得る人々のみに過ぎざるに至

らむ⁽¹⁷⁾と云つて居るのは、單に其の所謂近世式植民地制度即ち世人の所謂掠奪主義植民地制度を非難したるに外ならないのであつて、移民又は植民そのものを常に不利なるものと思惟したものは思はれない。

(13) Traité, Liv. II, ch. 11, § 1. (p. 383-90.)

(14) Cours, VI^e Partie, ch. 4. (p. 382.)

(15) Traité, Liv. I, ch. 20. (t. I, p. 383.)

(16) Cours, VI^e Partie, ch. 13. (p. 401.)

(17) Traité, Liv. I, ch. 19. (t. I, p. 365, 370.)

七

既に人口の増加、特に自らを養ふの資料を有する人口の増加を望ましとせば、此の増加は果して如何にして獲得せらるべきか。思ふに、此の増加は第一には出生數と死亡數との差による人口の自然増加を大ならしめることによつて得られる。古來諸國に於て人口の自然増加を奨励する爲めに種々の方策が採用せられ、就中出生増加の奨励策が實行された。Sayは其の例として、ヘブリュー人は獨身者と不妊の婦女とを非難したこと、羅馬に於ては *Papia Poppæa* 法によつて各人に子女の

數に比例して特權を興へ、ユリウス・ケーザル及びアウグスツスが人口検査官をして老童に罰金を課せしめたこと、宗教の教義に於ては子を持つことが成年者の義務であると教へられたこと、土耳其に於ては公傭人夫をして夜間に此の旨を叫び廻らせるの制度が行はれたこと等を擧げて居る。而も是等の人爲の方策は、Sayの見る所を以てすれば何れも其の所期の目的を達成することが出来なかつた。

其の理由は何れに在るか。Sayは之を人口の原則から推して説明して云ふ。『人口の原則は吾人に向つて、國の人口を増さむが爲めに採る諸方策の全然無用なることを示す。一國は其の養ひ得る人數以上を保有することはない。假令如何なる手段を採るとも、國が住民現時の風習に従つて養ひ得る人數は常に満たされて居るであらう。』『出生數は幾何なりとも、國の人口には影響を興へない』と。

然らば、人口は如何にせば最も有効に増加せしめられ得るか。Sayは、人口の原則からの推論を以て此の策を示して居る。曰く、『甕に液體が一杯に充ちた以上は、其の上更に液體を盛り入れ得るのは、更に液體を注入することによるのではなく、甕の容量を擴大することによるのである』。『眞に人口の増加を奨励するものは、多

大の生産物を與へる活潑なる産業である。『生産を助長するもの以外には、人口を増加せしめるものは何物もない』⁽³⁾修道院は人口の増加を妨げるが、それは世人の云ふが如くに僧侶の獨身生活の事實によるのではなく、彼等の無爲怠惰によるのである。生産物と産業との増加する所、出生は自ら既存の住民の割合に一層多大の増加を來す⁽⁴⁾。

(1) (2) Cours, VI^e Partie, ch. IV. (p. 381.)

(3) Traité, Liv. II, ch. II. §. 1. (p. 387, 388.)

(4) Traité, loc. cit. (p. 393)

一國の人口を増加せしめる第二の方法は、内地住民の外國移住を引き留め、外國の住民を招致することである。併しながら Say は、移住せむと欲する者を強いて國內に保留せむとすることには反對の意見を懷いて居る。即ち、第一に『人間を國人の如くに國內に保留せむとすることは、人間を國內に生まれしめむと欲すると同様に不賢明である』とする。蓋し、人口の地理的分布を決定する原則によれば、『一國は一國の養ひ得る人數以上を保留せむと欲すとも成功するを得ない。人若し

過剰人口が國境の門から去ることを妨げる場合には、人口は墓の門から去る』からである。第二に、『移住に反對する一切の法律は不公平なり』とする。蓋し、各人は一層容易に棲息し得べしと思惟する地點に赴くの權利を有するものであると做すからである。斯くして彼等は、『成人の移住は如何に悲しむべきものありとするも、強制的の法律は彼等を保留するの手段としては適切ならざるものである』⁽⁵⁾と云つて居る。又外人誘致の策として祝祭興行物等の效果と利益とを力説した者があるが、⁽⁶⁾は是等の手段は如何に大規模に行はれたとしても果して外國より多數の外國人を惹き附けるの力あるべきや否やに多大の疑問を挟み、或る種の無用なる愉快の享受は未だ嘗て遠方から多數の人々を吸引したることなく、祝祭興行物等は人をして旅行を企てるに至らしめることは稀であると做して居る⁽⁷⁾。然らば『人々を國內に保留し之を外國より招致する最良の方法』は何であるか。Say の云ふ所によれば、それは『人々に臨むに正義善良の態度を以てし、萬人に對して其の最も貴重視しつゝある權利の享有を保證するに在る。詳言すれば、其の身體と財産とを自由に處分⁽⁸⁾の權能、産業を行使するの權能、全く安全に往來、居住、論議、讀書、

著作するの權能を保證するに在る』。

(5) Cours, VI^e Partie, ch. VI. (p. 382.)

(6) Traité, Liv. I, ch. 20. (p. 380-1.)

(7) Ibid. (p. 384.)

八

以上、人口の數量如何、人口の地理的分布を決する原因如何、人口に關して探るべき政策如何等の諸點に關する Say の所説を見た。最後に、Say は人口の將來を樂觀して居たか悲觀して居たかの點を見よう。

人口數は將來益々増加すべきや否や。又住民の境涯は今後益々改善せらるべきや否や。各所に散在せる意見を綜合して考へるときは、大體に於て其の意嚮は樂觀に傾いて居たと判斷される。

先づ將來に於ける人口増加の趨勢に關する意見を見よう。Say は既に Cours の生産篇中に於て、生産が常に國の文明の程度に比例することを論證して居り、又前記の如く人口は常に生産に比例することを論證したので、是等二つの命題から推

論して、吾人は何處に於ても人間は見識あり開化して居るほど益々多數に上るものなることを發見する、と云ふ。而して、文明の進退と人口の増減と互に併進するの實例として、一方に於ては、十九世紀劈頭に於て最も低度の文明を有する濠洲人の人口頗る稀少なると、同地に英國の植民地が建設され英國の文明と技術とが輸入されて以來は住民の激增を來したこと、英米西の諸國に於ても文明の進歩に伴つて人口の増加を來したこと等を挙げ、他方に於ては、埃及が土耳其の暴政の下に來るに至つてから其の全人口は往時のテーベ一市の人口にも及ばなくなつたこと、シリア・希臘等も同様の事實を示したこと等を挙げて居り、『人口は常に生産物に追隨す、而して生産物は文明の進歩及び退歩に追隨す』と斷じて居る。而も Say が今後益々文明の進歩向上すべきことを信じて居たことは疑ふべからざる所であるから、人口は今後益々増加すべしとは正に Say の意嚮であつたとしなければならぬ。而して此の推定は、彼れが、過去に於ては人口も少なく産業も不完全であつたことを論じて居る一事によつても裏書されるのである。

(1) Cours, VI^e Partie, ch. V. (p. 379.)

(2) Cours, VI^e Partie, ch. VI. (p. 382.); Traité, Liv. II, ch. 11, § 1. (p. 397-8.)

然らば、人口増加の速度は、今後益々急速となるべきや、或は益々遅緩となるべきや。此の點に就いては、Sayの意見は後者に傾いて居たと判斷すべき理由がある。人口の限度を劃する生存資料の中で結局食料品が最も有力に作用するものなることは Sayの認める所であるが、Sayは此の食料品の増加の速力は今後益々遅緩となるべしと做したこと、即ち是れである。Sayは此の點を論じて次の如く云ふ。食料品増加の手段には限度がある、而も此の限度には、他の生産物に對して存する限度よりも一層急速に到達する。佛蘭西の如きに於ては、一億人に衣服を供給する爲めに羅紗を作ることは容易であるが、一億人に充分なる食物を與へ得ることは確實でない。勿論食料品は、騰貴の曉には多額の運賃を負擔して遠方から齎らされるに至るべきことは事實であるが、それは嵩高であり、運送が困難なるに至らば其の運賃は價格を國民多數の支拂能力以上に高めるであらう。海運は運賃低廉であるが、其の外に、生産地から積出港までと到着港から消費地までとの陸上運賃、各地に於ける積卸費用、保険料、手数料等をも支拂はねばならないから、豐饒な

土地の生産に係る小麥も勞働者階級の手の届かぬ程の高價に達するであらう。機械が發達改善を來すときは、食料品の生産増加と同一の結果を生ずることは疑ない。パンを一層廉價に取得せしめ、従つて一層多數の人口を養ふを得しめたる水車又は風車の如きは是れである。併し、蒸氣機關に至つては必ずしも然らず。馬一頭は土地二エーカーの生産物を必要とするから、馬の代りに蒸氣機關を使用すれば地上の生産物即ち食料品にそれだけ餘裕を生せしめるが如くであるが、而も蒸氣機關の普及は馬そのものゝ減少を來すことはあるまじく、寧ろ食料品購入の手段に供せられる生産物を増加せしめるに過ぎないであらう。有用なる技術が完成されるほど、新なる完成改良は益々困難となる。馬齡薯の栽培開始は人口の増加を容易ならしめたが、それが有らゆる地點で栽培されるに至つた場合には、最早その普及傳播は止まるであらう⁽³⁾。

(3) Cours, VI^e Partie, ch. IV. (p. 377, 379.)

次に、將來に於ける住民の境涯如何に關する意見を見よう。凡そ人間の境涯即ち幸福の大小は、先づ第一に物質的方面からの影響を受けるものである。而して、

此の方面に於ける幸福の大小は欲望の分量と比較して自己の自由に處分し得る生産物の分量如何に係る。こはSayの支持する所であるが、同時に彼れは、今後益々文明發達して生産も増加すると説いて居る。故に、物質的方面に於ては住民は今後益々幸福増大に向ふものと考へて居たとしななければならない。更に、人間の境涯は精神的の方面から影響を受けるものであるが、Sayは此の點に就いては人間の平均壽命の延長された事實に基づいて立論して居る。即ち彼れは、先づ諸國諸都市に於ける事實、並びに諸著者の所説を引用して、平均壽命の延長された事を論述し、平均壽命の延長は人口數には影響を與へないが人口の境涯には影響を與へると斷じたる後、大要次の如くに論ずる。曰く、出生及び死亡が半減した場合には常に出生及び死亡に伴ふ道德的、肉體的の苦痛が減ずる。又、吾人の知識、經驗能力等は幾多の犠牲を必要としたものであり、各人毎に反復されたものであるが、平均壽命が長くなれば右の犠牲は益々少くなり而して人間は苦しんで得た所のものを享樂し成熟の狀態に於て生活する期間が長くなる。然らば吾人は、平均壽命が長くなるほど人類は益々完全であると云ふことが出来る。勿論、右の場合には胚

種の喪失される分量は益々多大となるが、さらでに多量の胚種が失はれつゝあるのだから、之を以て一個の惡なりとは認め難い。惡は感覺ある者の受ける苦痛の中に在る、而も胚種は或る程度の發育を來した後でなければ感覺を有しないのである。醫學醫術の進歩は、人口の維持又は増加を來すべきものと見るべきでなく、それは人間の境涯を改善するに適するものと見るべきのみである(1)。

(1) Cours, VIe Partie, ch. 7.

要するに、Sayは人口論に於ても其の大體の傾向たる樂觀主義を示して居るのである。

九

以上の如くに吾人の見來つたSayの人口論は、素より、Sayのみに獨特なものであるとか、Sayが眞先に道破したものであるとか云ふことを得ない。生存資料を以て人口の限度なりとするこの如きは、既に Marquis de Mirabeau や Moreau が之を明白に論じて居る。特に、人口數の大小は生殖力の如何に依屬せざるものなること、並びに、資源の傷はれざる限りは、戦争も、疫病も、移住も、僧侶の獨身生活も何等

人口を減少せしむることなきことの如きは Mirabeau が説明して居る所であり、又安全なる生活の保證を與へることを以て移民の引留及び外人の誘致の最良策となすことの如きは、Moheau の所論の一部分に相當するに過ぎない。若しそれ人口増加を以て望ましきものなりとするの思想に至つては、マーカンテリズム時代並びにフイジオクラート時代を通じて殆んど總べての人口論の根底を成すものと云つて差支ないのである。人口問題の如く、早くから識者の注意に上り多年の経験や事實によつて檢證された事項に就いては、理論は年と共に陶冶され洗練されて來て、後進の者の新に附加すべきものゝては幾何も残されて居ないのであるから、Say の所論に新規なるものゝ少ないのは敢て異とするに足らない。

併しながら、Say の人口論には全然新規なものが缺如して居るのではない。彼れが人口の限度を劃する生存資料を解剖して、世人の動もすれば之を食料品と同意義に解し易きに反し、交換の自由ある限りは之は一般の生産物であるを傲し、特に無形的生産物及び資本をも其の生存資料の中に加へて居るが如きは其の一であり、所謂人口の原則を單に人口數量の問題の範圍内に於て樹立することのみ

に止め置かすして、之を人口分布の場合にも適用して居るが如きも其の一である。又 Say の人口論は、之を通讀するに當つて特に吾人の注意を惹くものがないではない。其の所論は Malthus の所論ほどに哲理的ではないが、而もそれは Taine 及び Cousin 中に取扱はれたる幾多の經濟論を自由に利用して居つて、人口問題を經濟問題として取扱つて居るの觀あることの如きは其の一であり、人口の原理に就いては Malthus と一致しつつも人口の將來に就いては Malthus ほどに悲觀の色調を示して居らないことも一個の對照として吾人の注意を惹く。Say は、文明の進歩が個人に生活程度引上の希望を起さしめることによつて人口増加を妨げるの一面を看過し、單にそれが生活資料の増加を來さしめることによつて人口の増加を可能ならしめるの一面のみを見て居り、僅かに此の生活資料の増加率の漸次減少すべきことを認めるのみである、而も斯くして生すべき人口増加率の減少を見るに人間の境涯の改善を以てし幸福の増大を以てして居る。吾人は、佛蘭西人に通有とも見るべき樂觀 Say の學說の全體を通じて流れて居る樂觀が此の點にも著しく浮き出て居るのを見るのである。